

東方project 始祖神と邪神の力

デリシャ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大二病の大学生が、古本屋で買った古文書を読み、幻想入りさせられる。

そんな、訳分からない世界で、生すきていく大学生のお話

目次

プロローグ	1
神様達と、始祖と邪	6

プロローグ

世界には、始祖神と呼ばれる物が、存在した。
彼は、純粹無垢な心を持ち、強大な力を持っていた。
ただし、彼は自らの力の大きさに気づかなかった。
何故なら、彼は孤独だったから、
孤独故に力を比べる相手も、存在しない。
彼は、自分の力を知らなく彼は、創り出してしまった。
自らの、孤独を無くしてくれる。
存在、そう人間を……

彼は、いつまでも彼等人間達が動物や自然に、触れ合い自分と、同等の存在に成長していく事を、期待して。

自分が、独りぼつちから解放される事を期待して……

しばらく経ち、彼等は様々な技術や、知識を手に入れる。

そして、彼が更に人間が成長できるような、出来事を彼等の世界に、起こしたのだ。

元々彼等が、持っていた感情、

愛情、悲しみ、幸福。

それに、新たに感情を授けた。

悪意と、善意と呼ばれるものを、彼等はそれを正しく見極める事を、できればいいと、

ただ、それは失敗だった、焦りすぎたのだ、彼等には完全に、悪意と善意を見極める事が、出来なかつたのだ。

彼等は、悪い方向へと、進んでいった。

自分の、都合のいいよにする為同じ、人間を支配し戦い、殺し合うそんな愚かで悲しい、出来事を起こしてしまった。

彼は、悲しんだ。

今までは、人間同士で助け合い、生きてきた人間同士が、殺し合う。そんな光景を、見た神は、とても切なく大粒の涙を、流しそれから、彼は、自分と同じ力を持ち悪意に満ちた、存在を、創り出した。

そして、その存在を人間の世界に、送り込んだ。すると、多くの人は逃げ惑い、捕まった者は悪意に、染まった存在や、欲望のままに生きる存在に、変わっていった。

その存在は、知恵を持ち仲間を増やし、最悪な状況へと、人間を追い込んでいった。

だけれど、人間は皆で助け合い、対抗していた。力を合わせ、悪意ある存在の元凶である、『邪神』と呼ぶ者に、立ち向かっていく。

その、健気とも言える彼等人間に、彼は誤解をしていたと、反省し『始祖神』である、彼は『邪神』と呼ばれる存在を、封じる為に自分とは、別の神を、作り出し、信仰を得る事で、人間に歯止めを掛け、時には悪意ありき者から、守り通す事を任せ、始祖神は邪神と、共に1つの、黒と白がまざりあった、宝玉になった。

そして、残された新たな神たちは、世界を作り替えた。

最近は、暇である。

何故なら、普通の一般人というか、なんの才能もない、俺には何かいい事が、起きるとも考え難いが、

俺は、子供っぽいのだ、大学に入ればなんか、変わるんじゃないかなーとか思いわざわざ慣れない、勉強をしある程度、偏差値の高い大学に入ったのだが……。

逆に、何も変わらなかった、なんかとてつもない恋愛が、始まるのか、とんでもない出来事に巻き込まれるとかは、全く起きなかった。ただただ、普通の大学生活を送るだけだった。

まあ、普通の大学生活を送るだけでも、いいのだろうがそんなのは違う！、そう今からでもいい！

命が無くなるうが、とんでもない出来事に、巻き込まれたいと思ひ。買ってきたのが、この古本屋で買ってきた、古臭いとゆうか古文書的な、なにかしらの本、軽く見てみると何かしらの、アニメとかである、なんだつけえつと、あの星のマークみたいなの！、

まあいいとして、それが書いてある所に、呪文が書いてあったのだ。「いやはや、本気でなんなんだろうか、まあ偽物でも、十円だったし、タダみたいなものだよな！」

そう、いいながら本に書いてある、日本語の文字を読んでいく。

「えつーと、なにになに？」

興味ないページは、ペラペラと読み飛ばしていきながら、自分一人しかない、アパートの一室に紙の擦れる音が響く

そして、

「ほうほう！、マジか!!、これって異世界的な所に行く方法かもしれない！」

ただ、余り期待していなかったのだが、書いてあった書物には、『この書物を持つ者、この書物に示された術式を、読める其方は、私が作り出した、世界にいる私を、受け容れられる、人物だろう、そしていまから、其方を、その世界に案内しよう。』

「えつ、ちよつと今つて？、今つて今かよ！」

てあれ？、身体が透明になつてる！マジか！

まだ準備が！くくく」

透明に、なつていく身体を見て焦る自分には、関係ないようで、どんどん、消えていく、

「まっ、て、まだ！、ポテト、チツ、プスの青のりくがー!!」

そして、意識と共に、消失した。

キャラ紹介！

光霧 鞆波 (こうぎり さやは) 20歳 男

少し、大二病まで引きずっている大学生。

一応、やればできる子なのだが、やる気根気本気が、ない！

大二病まで、引きずっていたせいなのか、少し狂氣的な願望がある。

たまたま、古本屋で買った本が、幻想入りの方法を、書かれた謎の本だった。

自分からとゆうより、半強制的に幻想入りした？

ただ、そのおかげで持っていくはずだった、「コイ○ヤのポテトチップス 青のり味」を持っていけなかった。

容姿 ちよいイケメン

身長 178cm

性格 お布団とポテトチップスが好き。

ロリコンだが、自分では意識して、おらずさらにタチが悪い。

大二病のせいかなのか？、倫理観より娯楽を大事にする人間。

ネタバレ注意、

能力 有と無を操る程度の能力

あらゆるものの、有と無を操る力。

能力を使うと、左手はその部位だけ、元からなかったようになり、右手は異様な存在感を発する。

例えば、左手で物を触ると、完璧にそこにあつた痕跡も消える。
右手では、想像した物や、そこにはない物を存在させられる。

全ての力を操る程度の能力

霊力や魔力を吸収し、自分の力に変えたり、相手の中に、流れる力
を変えて操ることもできるが。

自分自身に馴染んだ力ではないため、自由に使えない。

神様達と、始祖と邪

みなさん、どうも鞘波です！

皆様、今の俺状態どうゆう感じだとおもいます??

予想できましたでしょうか！

そう俺は……

「空の上にあります!! ってか、ふざけんな!?

死んじまいますよ!?!、いつもの事じゃないけどこんな、楽しくないよー!?!」

そんな事を、落ちる中叫ぶ。

しかし、某アニメの悟○の様に空を浮遊する事など、一般人の俺には出来ず、ただただ、重力に伴って落ちるだけだ。

「ヤバイ…地面が近くに…」

いつの間にか、地面は眼前に迫っており、その瞬間

俺は思った

↳ 『人生オワタヽ(ωヽ)／』とヽ

『いやはや、呼んだ人間を空に転移させしめようとは、失敗したな…ははっ…』

そう自身の、失敗を乾いた笑いを浮かべながら、言っているのは、すべての世界の『始祖神』である…。

彼は、1度邪神と呼ばれる弟の様な関係の、邪神と戦い封じる為に邪神と共に、黒と白の混ざり合った玉になったのだ。

『つたく、器を見つけたとか言ってたから、期待してたらこのざまかよ…』

そして、その失敗に呆れるように答えるのは、高位の妖怪でも吐き

気を感じる様な、妖気をだだ漏れにした者であった。

『だつてさー、探し始めてから何万年待ったのに、だーれも読めないんだよ!、失敗したつてしょうがないじゃないか!』

そう、どれだけ待ったかを力説しながら、言い訳も語った。

『そう思うなら、落ち着け!。別に、人間が死んだ訳じゃないんだ、とりあえず今から一体化しに行くぞ!!』

『始祖神』を、引き摺りながら人間のいる所に、玉の姿で転移した…。

すぐに、人間がいる場所へと辿り着く。

そして、目の前の空中で、死んだ様に動かない、人間の身体に、玉の状態で人間の身体に自分達と繋ぐ、術式を埋め込んでいく。

『どう?、できた?!大丈夫?!』

『そんな、気になるのなら手伝え!!』

なにも、手伝わない『始祖神』に対して激怒する。

『わかったよ!、えーとつ、こうか!!』

『おい!、なに、やつ?!』

『でけた!どう?、どう?』

『始祖神』の、天才的なスペックは頭の隅には、置いてあったものの、苦勞して組み上げていた術式を一瞬で組み上げてしまったのは、なにか釈然としないのだった。

『早く!一体化できなく、なるよ!』

『わかったよ…』

『邪神』は、内心釈然としない中、忠告を素直に受け止めて共に、光の穴の中へと入っていった…。

守屋神社では、二人の神が、神社の巫女である緑髪の少女の入れたお茶を、縁側で悠々と飲んでいた。

「やつぱり、早苗の入れたお茶は美味しいわね…」

「だね〜」

「そうですねか?、ありがとうございます」

そんな、ゆつくりした時を最近起きた出来事や、思い出話をしていると、大きな地響きが起きる。

そして、地響きの起きた周辺から力が満ち溢れる様な神力と、大きな吐き気を催す様な、妖力と思われる力がただ漏れになっていた。

「うっ!、なんだい?!この力は!」

「よくわかんないけど、変だよ!」

「うっ……」

背の高い青髪の神と、外見としては幼女にも見え、頭には特徴的な蛙の様にも見える帽子をかぶった、神の二人はなんとか耐えてはいるが。

巫女の緑色の長髪の少女は、その力にやられ気を失ってしまった。

「早苗!?しつかりしな!!」

「神奈子!早苗をお願いするよ!!」

「諏訪子!あんたどこいくんだい!」

「とりあえず、何処にいるかだけハッキリさせてくる!!」

そう言うと、空へと飛んでいく。

先程の、地響きの起きたと思われる場所へと、向かっている途中、不思議な光景に出逢った。

放射線状の、形を綺麗に半分にした左側は、様々な動物から、魍魎まで黒ずみ、灰の様になり始めているのに対して、右側では動物はいつも以上に元気そうに生活しており、魍魎も穏やかになっているという光景であった。

そして、その異様な雰囲気のある場所に近づくと、異様な者がいた。

背中には、輪があり左半分は異常な程黒く、陽炎の様なモノまで現れていた。

さらに、右半分はとても明るく後光でもあるように、煌びやかに

光っていた。

私は、知らなかった。

その者が、あらゆる者の始祖だとは。